

伝えることと伝わることについての一考察
－ 出産前後にかかわった母親との事例検討を通して －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
石川 恵子

筆者は現在、看護専門学校の教員として学生の指導・支援にかかわっている。それ以前は、看護師・助産師として臨床の現場で働いていた。多くの母親との出会いのなかでは、保健指導の場面に携わることが数多くあった。こうしたなかで、筆者がかかわってきた相手との間における「伝えること」と「伝わること」へのこだわりをもち続けてきた。

すべての行動には目的がある。「伝えること」においても同様である。対象が多人数であっても、伝わってほしいと期待することは一人ひとりに対してである。伝わってほしい人を特定できる場合もあれば、できない場合もある。伝えることにおいて大切なことは相手に伝わったかどうかである。しかし、筆者の経験のなかでは、伝えただけで伝わったと思ひ込み、自己満足していた場面が数多くあった。筆者が助産師として出会ってきた母親との出会いの中においても同様であった。

本論文では、事例検討という方法により、医療現場において出産前後に筆者がかかわった母親との事例を振り返り、伝えることと伝わることについて、そこで何が起こっていたのかについて考察し、今後の母親援助、及び現在直接かかわっている看護学生への援助に生かせる視点を整理したいと考えた。

期待した通りに伝わらない最大の原因は、伝える行動をとれば、相手に伝わると思ひ込みである。なぜ、伝えたいのか、何を伝えたいのか、どう伝えればよいのかに加え、相手と自分にどのような関係が形成されているのか、伝わらなかった場合にはどうなるのかなどについて、意識し考えていく必要がある。受け取る側、伝えられる側の状態や自分との関係を見極めながら伝わる状態をつくっていくというプロセスが大切になる。

重要なことは、伝えたいことがすべて伝わるという結果だけがすべてではなく、双方が分かり合おうとして関係を深め、伝える工夫を重ねていくといったプロセスにあるのではないかと考えるに至った。今は、そのためには、伝わらないことを許容していく姿勢が、筆者にとっては特に重要となると考えている。本論文における事例の検討などを通じた振り返りを通して、この点が今までの筆者には欠けていた視点であることに気づきが生まれていった。

「伝えること」において、必要な視点は、相手が様々に変化しても共通していると考えている。それは、伝える側の姿勢、伝える内容、伝える方法、相手との関係である。今後、学生との関わりのなかで、意識的に事例を検討することを実践的な課題としていきたい。